

虚空山病院

井本元義



「一」

私はその病院の玄関に立った時、昔読んだ小説を思い出した。

埴谷雄高の小説の出だし「・・・ある夏も終わりのある曇った、蒸し暑い日の午前、××瘋癲病院の正門を、一人の瘦せぎすな長身の青年が通り過ぎた。・・・青年は広い柱廊風の敷石を昇りかけて、ふと立ち止まった。人影もなく静謐な寂寂たる構内へ澄んだ響きを立てて、高い塔の頂上にある古風な大時計が時を打ちはじめた。・・・」

その大時計の文字盤には数字はなく、代わりに十二支の獣の形が描かれている。「青年はその異風な大時計を眺めたのち、玄関から廊下へすり抜けていった。」

そのように私も玄関へ入っていった。そこに受付はなく、古い板張りの廊下を急ぎ足で抜ける看護師に私は受付の場所を聞いた。初老の、もちろん化粧などはしていない彼女はそれでも親切にいま彼女が出てきた廊下の先を差して教えてくれた。あとは殺風景な板壁と廊下の椅子に杖をもった老婆がこちらを見て座っている。天井には不釣り合いな明るい蛍光灯がぶら下がっている。何か居心地がいい。

ここは戦前からの精神病院で、市内のはずれの山中にあった。そばには周囲、一キロメートル以上もあろうと思われる大きな池があつて時期には農業用水の役目も果たしていた。

池の中心部はそうとうに深いと言われ、そこには何が沈んでいるか不気味でもあった。自然のままだったので、四季折々の野鳥が飛んできた。裏山はさらに深い森へ続いているので、時折猿や鹿が迷って出てきたりした。

それで戦後も二十年経つと市内の人口は増え、市は病院の傍の山を切り開き整備して住宅の分譲地として開発した。市の安い分譲住宅だったので評判がよく、地域の人口も増え年ごとに交通網も整備された。雨の日は泥に絡まれながら下まで歩いて行かねばならなかった坂道にもバスが通るようになった。

病院は世間の要望を受けて、内科や小児科を開設した。やがて外科や整形外科の手術も大学と連携し、救急科も開設された。長期入院用の慢性型病棟も併設され、少し離れたところに老人施設ができ、精神科病棟が山を切り開いたさらに奥へ移設された時は、戦後ももう七十年経っていた。

創立時からは様々なことが語り続けられていた。病院建設時に山を切り崩す際、崖の岩の祠に安置された菩薩像が見つけられたということだった。市役所に連絡すると市内のある寺に引き取られてしまった。後の鑑定ではそれは平安末期に作られた国宝級の虚空蔵菩薩ということだった。それでそのあたりの山が虚空山と呼ばれるようになり、病院名も虚空山病院と名付けされた。おかげで神聖な空気があたりを支配しているようにも噂された。

虚空山とは変な名前だったが、病院案内には必ず、その由

来が書かれていた。虚空蔵菩薩の里であると言うことと、虚空蔵菩薩の意味も説明されていることもあった。無限の空間に溢れる知恵と富と愛。それらから、違和感のない病院の名前になった。

しかし戦前の精神病院であるから、怖い生臭い話もあり、戦後のどさくさにもキナ臭い怪しげな話もあったが、それも何十年も過ぎてしまい、市内でも住みやすいという評判の平穏な住宅地の大事な病院であるから、変な話はいつの間にか消えてしまっていた。

最近にいたっては、介護老人保健施設、特別養護施設、老人ホーム、日帰りデイサービス施設、看護学校などが周りに点在して作られ、それでも足りないという勢いで大きな医療施設グループが出来上がった。

今の理事長兼院長は二代目で、私の大学時代の友人、久能阿明だった。そろそろ三代目の予定が必要だろうが、彼は結婚していないので三代目は分からない。

彼に会うのはほぼ五十年ぶりである。彼とは同じ大学の文芸部のクラブ活動で、雑誌を出したりしていた。二年足らずのそう長い付き合いではなかったが、その趣向はよく覚えていた。そして若者特有の議論を交わすいい仲間だった。その短い時間はあとの人生の長さに匹敵する、いやそれ以上に記憶の中に心地よい甘いしこりのようなものになつて残っている。

例えば大学の前の喫茶店で暇を持て余して座っていると、よくそこで出会う。するとテーマがなくても、お互いに何か言葉を吐きだしたくなりそれが議論になりいつまでも続く。それが何年も経つたある日、ふと蘇ったりする。若い甘つたるい時間でも、それは単なる郷愁ではなく、その後の日々の生活にさえ影響を与えていたのに気付く。

彼はドイツ文学を愛好していたが、私はフランス文学科の学生だった。卒業しても仕事はなく、私はやむなく英語教師として四十五年を過ごした。仕事と言え、嫌な事ばかりが思い出される長い時間だった。その後は予備校の講師として、あとは臨時講師として仕事をしたが、それも終わりに近づいた。年も七十歳をかなり過ぎた。

妻を十年前に亡くし、子供はいなかった。私たちはごく普通の夫婦で、私は妻を愛していたし亡くなる前の悲し気な眼が何時も思い出されてその都度私は氣力を失っていった。しばらくは不便であったがそれに慣れると気ままな日々だった。読書は長い間の趣味で、下手な素人小説を書き同人雑誌に発表することで、時間を過ごすことがただ一つの楽しみで救いだった。三流雑誌に駄文を依頼されることもあった。だが三年前に大腸がんの手術をしてから体力も落ちた。しばらくは命にかかわる再発はないということだが、最近の前立腺癌の検査を勧められている。

はつきり言つて私は自分の生の意味を全く感じない。存在の意味はないと断言できる。希望とか過去の思い出を楽しむ

ことに意味を覚えない。生を絶たれる死を恐れてはいない。それに至る過程が厭なだけである。どうやって安心して最期を迎えるかを考えるだけである。最初は軽い気持ちであったが、最近はだんだん真剣に考えるようになってきた。

何年生きるか分からないし、長く生きたいという気持ちもない。そう思うといつの間にか自堕落な生活が身についていた。他人が家に来ることはなかったが、もしその時は誰でもその汚さに驚いただろう。

ものを書きたいという思いはあつても氣力が伴わなくなつたが、それでもそう思いつめていた若い頃の情熱を思い出すと寂しさと懐かしさが蘇る。

ものを書くことは、自分の考えや感性を原稿用紙に書き込む事だが、それは未知の世界、憧れの世界に自分を情熱をもつて投げ込んでいく事である。それでも、もうものが書けなくなつてもその情熱の欠片が日々の生活の中でふと姿を見せる時がある。胸の中を微かな風が吹き抜ける。そんな時は胸腔の内面が搔きむしられる思いがする。

私は老年を迎えてもまだ欲情の波に捉われることが多かった。ものを書きたい、書けない、そんな葛藤は欲情に救いを求めて流されるようになっていた。何かを求めても叶えられないと思う時、そしてその諦めに安住しようとする時は、欲情の赴くままに陥ることが自然になる。私は恥を忍んで市中の淫靡な場所をしばしば訪れて自分を慰めた。虚脱と哀しみと、書けない空虚感と自堕落が悪循環になつてその中で私は

生きていたのだ。私は恥と言う言葉を忘れた。

ある時新聞の広告で、虚空山病院の新しい介護老人保健施設と特別養護老人ホームの開設の知らせを見た。そこに小さな写真であったが、理事長兼院長の友人の顔を見つけた時はそれでも嬉しかった。長い髪はちぢれ毛で、色も浅黒い。もともと彫りの深い顔立ちだったが、眼はさらに落ちくぼんでいゝ。かすかに面影は残っている。その表情に内部に秘めた苦しみを感じたのは、甘い青春の欠片を私が抱えているせいかもしれない。丁度いい、会いに行こうと私は即座に決めた。今まで仕事上で付き合う人間はあったが友人と呼べるものはもう長い間持たなかつた。そのせいもある。思い出を樂しむことに意味はないと言いながらも、やはり二十歳の頃の友人は懐かしい。いろいろ議論を戦わせたのを思い出すと嬉しい。私は早速面会要望の葉書を書いた。昔話をするつもりではない。どれかの施設に入ることができたらどうかと、希望を持っている。今すぐでなくともやがて近い将来には間違いない世話にならねばならない。そこまでは書かなかつたが、それは会つてからでいい。だがしばらく連絡はなかつた。

久能阿明はドイツ人の母と日本人の混血児だつた。父の威一郎が大学を卒業して精神医学の勉強にドイツに行ったのは、一九三〇年代の中頃で、世間はインフレと共産主義の恐怖の時代で、その不安を払拭するようにナチスが台頭し政権を取

つたばかりで勢いの良かったころだ。

威一郎は恩師の教授の娘と恋に落ちて、帰国する時に連れ帰りすぐに結婚した。アデレと言う名前、古風な、と言う意味のある通り、西洋人にしてはしとやかで控えめな女性だつた。小柄で金髪だつた。

しかしおとなしい割にはその父をひどく嫌つていた。父はナチスの熱狂的な支持者で、弟もナチスに入隊しようとしていた。そして彼女をナチスの将校と結婚させようとしていた。アデレはその環境から抜け出したかつたのだ。駆け落ちのよくな形で彼らはドイツを脱出した。

太平洋戦争が始まつた年に息子が生まれ、阿明と名付けられた。アメイとは驚と言うドイツ語らしい。

学生時代には彼はあまり生い立ちについて多くは語らなかつたが、親しい付き合いの時間で、私はある程度は知ることができた。しかし深く聞こうとすると拒否される気がして控えめに聞いていた。興味はあつたが、聞いたこと以外は詳しくは知らない。

阿明はそう背は高くなく髪も眼も黒かつた。白い肌と顎の張つた彫りの深い顔立ちだけが異国人の血を思わせた。私は彼と街を歩く時は誇らしく嬉しかつた。

三週間ほど経つた時にやつと連絡が来た。私は出かけた。蒸し暑い夏の午後だつた。

院長室は精神科病棟の最上階で、大きな窓から周りを樹々

が取り囲んでいる池が見下ろせた。二十畳ほどの広さだ。窓に面した机には書類が山積みそのままである。大きな蛍光灯スタンドは古い。反対側の壁には訳の分からない暗い大きな抽象画がかかっている。觀賞用でもなく、た患者が描いたから掛けているというようにも見た。その下に彼の休息用の古い皮のソファアが置いてある。それに向かつて両側の壁にはスピーカーが設置されている。手元にはステレオセットのアンプ。相変わらず音楽が好きなようだ。棚には無造作に塑像や置物が置かれており、どれもただ倉庫替わりにされているようにもある。レコードやCDも雑然と並んでいる。部屋全体がもうかなり古いが、埃や湿っぽさや黴の匂いはしない。

院長らしい風格のある部屋ではなくどこかちぐはぐである。ただ甘い煙草の香りが部屋の古さを品よくしている。中央のソファアの丸テーブルの生け花だけが生氣がある。さつきまでの蒸し暑さと違って開けた窓からの風が気持ちいい。

隣の部屋が書庫で、その先が彼の居住の部屋らしい。誰も立ち入らせない居住空間のようだ。多分それも古ぼけているだろう。身の回りは家政婦に任せ、食事は患者と一緒に三食とも病院食を摂ると言いうことだった。

彼が全く別人のように変わっているのも、五十年経過の年月では当たり前の事だったろう。しかし新聞の写真で一度見ていたので、それほどの驚きはなかった。と言うより写真で見た時の驚きが大きかったということだ。私は少し救われた。背は私より低かったはずだが、今は高い。動作はゆつくり

していて、視界でとらえなければ傍にいたのが分からないくらいだった。歩く時も浮かんでいるようだ。もともと彫りの深い顔立ちが、やや病的な痩せ方に見える。それでも最初に合わせた眼は懐かしそうに眼鏡の奥で光った。しかし握手の手は細く弱く冷たかった。

挨拶の後、近況をいくつか報告するともう話はなかった。私の書いた小説の評を新聞で何度か見て思い出していた、と言う言葉は嬉しかった。ただそれ以上の何かの議論のきっかけを探そうとする昔のような言葉を、お互いに探しているようだが会話は進まなかった。

煙草の缶入りのピースを吸っているのは昔のままだった。いつも一服してから読んだ小説の感想を言い合うのが始まりだった。老人施設への入居などの話は場違いに思われた。

思い出すと彼が最初に感動した文学作品は「若きウエルテルの悩み」だった。それについての感想は何日間も続いたものだった。それを話のきっかけにしようとしたが、彼が発した言葉は、病院内でも案内しようか、だった。私に断る理由はない。

院内は思ったより広く、いくつもの建物を継ぎ足して迷路のようになつて彼についていくのにも一苦労するほどだった。すれ違う職員や看護師たちは誰も院長に挨拶するのに尊敬の念が感じられた。

まず案内されたのは彼の専門の精神科だった。精神病棟の入口の大きな扉は逃亡を防ぐために鍵がかかっている。やは

り患者用のためには仕方がないのかと思うが、病室はどこも落ちついた薄明るさで清潔だった。窓は閉まっている代わりに空調が心地よい。私が入院していた大学病院でもこんなに清潔感はなかった。六人部屋などのカーテンがないからかもしれない。寝ているもの、ベッドに座ってた。うなだれているもの、院長の顔を見て何か言いたそうに嬉しさに顔をほころばせるもの、様々だった。

続く広い部屋は天井も高く、広々とした小学校の講堂のようなものだった。これも空気は心地よい。広い床には畳があり敷物があり、壁には本棚が整理されている。患者は思い思いの格好で寝転んだり、立派なソファーに座つてのんびりしている。床に腹ばいになって本を熱心に読んでいるものもある。ひそひそ話の二人もいる。すれ違った患者の一人が私を指して院長に話しかけてくる。

先生、新しい患者さんですか。彼は答える、そうだよ。

次の扉を開けるとそこは薄暗かった。細い廊下に並んでいるのは、船の客室のような二部屋だった。廊下の小さな窓から部屋をのぞき込むことができる。院長はその一つを開けた。四畳ほどの広さはほのかな明るさに心が落ち着くようだ。ただ壁から床から全部護膜で覆われてどこにも鋭い角がない。丸い穴倉と言う感じだ。天井の上の方に明かり窓があるだけだ。こういうところで時間を過ごしてもらわねばならない人もいる、彼は静かに言った。

その先は大きな白いドアで仕切られている。ここから先は

もういいだろう、脳性麻痺や重度の障碍の子供たちの部屋だ、国から委託を受けている。助からない短い命を必死で生きているのに国の予算は限度がある。それでうちで引き受けている、彼は淡々と言った。

あと手術室とか放射線室とか老人施設もあるが、と彼が言いかけた時、私はもういいよと断った。自分の死に場所を確認しに行くような気がしたからだった。

部屋に戻つてもすぐに言葉は出なかった。私の全身の力は抜けてしまっていた。このままで帰るわけにはいかなかった。その力もなかった。彼は黙って煙草をくゆらしている。

白衣の女性がコーヒーを運んできた。整った顔つきで昔は美しかっただろうが、もう六十歳は越えているようでそれなりに老いの翳りが見える。いや七十歳にも近いかもしれない。すこし暗さも感じるがそれは初対面の緊張のせいだろうが、落ち着いた身のこなしには何か魅力がある。五十年ぶりの大切な友人だと前もって話してきてくれたのだろうか。

うちの総看護師長だ、と彼が紹介してくれる。返してくれる類笑みは品があり美しい。独身の院長の恋人かも知れないなどと思う。最近の私はこんな風に女性と向き合うこともない。それでくせになつたのだろうか、目の前に男女が現れるとその結びつきをすぐに想像するようになった。妻が死んで一人になつてからだ。

珈琲の苦みが気持ち少し落ち着かせてくれた。

私はやっと昔の思い出話に戻るきつかけを掴んだ気がした。「君が、若きウエテルの悩み、を読んで感動したと言つていた頃を思い出すよ。立て続けに二回も読んで、ずっと涙が止まらなかつたと言つてた、憶えているかな」

「そうだ、今でも読むと泣くかもしれないが、この年になつての涙は滑稽だし、もう読まないよ、でもその頃の感動は忘れられない」

年に二回ほど出す同人誌に私と彼は作品をいつも発表していた。大学内の新聞や市中の新聞、たまには中央の雑誌などが取り上げて批評してくれたものだった。

だが次第に彼の作品が取り上げられることは少なくなつた。彼の趣向がドイツ世紀末のロマン派から退廃文学や怪奇小説に代わつていき、作品も意味の良く分らないフレーズで埋め尽くされるようになっていつたからだった。君の暗黒小説は人に理解されなくてもいいのだろう、と私は彼に言つてそしてまた議論を始めるのだった。

狂王ルードヴィッヒのノイシュヴァンシュタイン城に興味を持ち、行きたいと言つてからはワグナーに凝りだした。そしてバイロイトのワグナー祭には必ず行かねばならないと言つた。田舎の小都市バイロイトには「梟」という古いカフエがあつて、音楽祭を訪れてそのカフエで一杯飲んだ貴人たちは、歴史のある台帳に名前を記載して帰る。当時のナチスの将校も必ずそこを訪れたらしい。彼もその一人になりたいらしかつた。

同時に、第一次大戦後のドイツのワイマール共和国に興味が移つていった。当時の庶民の生活は困窮し、社会情勢には不吉な未来しかない、一方では淫らな風潮が蔓延した時代にナチスが台頭してくる。賛同する哲学者もいれば、トーマス・マンなど多数の芸術家が亡命する。

トーマス・マンの小説は好きだ。一見硬そうでも、底に退廃と猥雑な匂いがする。ナチスにも同じ匂いがする、などと訳の分からない言葉を残して、彼はある出来事のあと突然姿を消したのだった。

「ところで君は、それでドイツ、バイロイトには行つたのか」

私は今は何でも聞ける氣になつていた。

「いや国を一步も出ていない、出かけたとは思わなくなつた。同じことだよ、見ても見なくても」

苦しそうに咳込みながらも、はつきりした口調で彼は答へた。

「お前の方こそ、どうなんだ。地中海から昇る朝日を、カミユのように眺めたいと言つてたな、それから彼の墓参りもしたいと」

私は十年前の妻の死や三年前の癌の手術がなければ、いつか日を見てアルジェリアかモロッコのツアーに参加しようと思つていたのだった。それがだめになつて時間が経つとその氣持ちもいつの間にか失せていた。どうでもよくなつていた。

これからはやむなく病に侵されることが多くなってくる。しかし一つ一つの病氣と闘う気持ちはない。その嫌な過程を避けることができるのなら、苦勞して生きながらえる必要はない。生き永らえて輝くような喜びの日々が確實につかめるということであれば、別だが。氣休めの旅行など、一人で行くても何も面白くないし意味もない。

学生時代の私の愛読書はアルベール・カミュだった。最初に読んだのは一般的には失敗作ともいわれている「幸福な死」で偶然手に取ったものだった。しかも死後に発刊されたものだ。

主人公は金持ちの不具者を殺害して金を得る。彼はその金持ちから自分を殺害して金を奪つてもよいと示唆されたと認識する。しばらくは苦しい陰鬱な時間を過ごす、明るいふるさとアルジェリアに戻り、若い女性たちと気ままな生活を送る。海、太陽、風が自由と官能的な欲びを教えてくれる。彼は結婚し、牧歌的な生活を味わうが、熱病のうちにうつりとなつて死んでいく。

反社会的な作品だが、嫌悪感はない。むしろその後も続けて「異邦人」や「ペスト」を読んで私はますますカミュの世界に入り込んだ。思想や哲学的なテーマはまだ良く分からなかったが、主人公たちの人間が何故か身近に感じられて私を魅了した。

私の卒論はカミュ論であつたが、そのころカミュの深い哲学的な意味をよく理解はできていたとは思われない。いくつ

かのフレーズが鮮明に記憶に残っているだけで、文章にはできなくても身をもつて感じる事ができたと思つたのは、その後の五十年の人生を通り抜けてきたあとだと思ふ。いい加減な人生であつても、いやそれだからこそ感じる事ができたのかもしれない。しかし今の私にはどんな思想も感動も必要ではない。もちろん人人生の指針などではない。ああそうかと思ふだけである。

ただこうやって、数十年も前の青春の友と語り合うのはいい気持ちではある。「シジフォスの神話」や「反抗的人間」や「形而上的反抗」などの本を手にとり、一行一行を噛みしめて、よく分からなくても議論したものだった。

「反抗とは人間がその条件に対して立ち上がる行動である」「反抗者は生を求めるのではなく、生の理由を求めている。死のもたらす結果を拒否するのだ。何物も持続せず正当化されないとするれば死ぬものは無意味になる。死と戦うことは、生の意味を要求し、法則と統一のために戦うことである」

人間の条件や現実生活の中にある不条理を認識し、これに絶望せず絶えずこれと戦いながら、しかし失敗を繰り返しながら、生の意味を味わう、この日々が人生であるということまでは分かつたが、カミュが説くニーチェの二ヒリズムの段になると分からなくなつたものだった。

「欲望と権力の法則以外の全ての法則を拒否したものは、自殺か狂気に走り、そして黙示録を歌つた」

この自殺か狂気、の言葉に私と彼が訳のわからないまま何

度も繰り返し喋り合ったのを思い出す。我々もいつかはそんな状況で人生と戦う時が来るのだろうか。それは具体的にどんな場面なのか。それは絶対に耐えねばならないだろう。だがどうしようもない苦しみと恐怖であるには間違いないだろう。それは避けたい、自分たちの未来にはそんなことは起こらないだろうと思いつつも、青年たちはなぜ絶望とか発狂とか不条理とか黙示録とか言う言葉が好きなのだろう。

その思い出が浮かんできた時、偶然だろうか、私の考えが伝わったのだろうか、不思議なことに院長もその言葉を発した。

「自殺か発狂か、昔は、こんなことを語り合ったこともあったな。この前、夏目漱石を読んでいたら、そんな言葉に出会ったよ。それでお前の事を思い出したりしていたのだ。」

昔、左翼のテロリストが空港で銃を乱射して無差別殺人をやったことがある。彼は捕まって死刑判決を受けたが減刑された。そしてもつと酷い仕打ちを受けた。外部と完全に断ち切られた独房に長い間閉じ込められた。ときどきは外に出たが、それはリンチを受ける時だった。殺さず生かさず隔離されて長い時間が経ち、彼にとつてはもう長い短い感覚にはなくなつた時、彼は全くの痴呆状態になつたのだ。自殺する暇はなかつた。

ある考えを突き詰めたら、我々もあるいは理由もなくその独房に入れられている状態と同じではないか。それに気づく

ないままなのではなかるうか。長く生きながらえるということとはそんなこともかもしれない。自分の生だけを見つめていたら、そうなるのではないか。

この話の流れとは違うが、漱石はその後、然らずんば宗教か、と文を入れている」

阿明との再会の五十年ぶりの午後は終わつた。彼は総看護師長を呼んで、私をタクシーで市内まで送るように言いつけた。私は喜んで甘んじた。私と彼の別れはあつさりしていた。私が、じゃあまたな、と言つても彼はうんと頷いて部屋の前で別れて背を向けた。疲れているようだった。

彼女は老年に近いとはいへ、私服はまだ女性の魅力を十分に漂わせていた。白いブラウスはタクシーの中の汚れた空気にも爽やかさを失わなかつた。そして私の矢継ぎ早の質問にはゆつくりと答えてくれた。彼女はいつからここに勤めているのか、院長の結婚は、父親の前院長は、病院の経営は、何か特筆すべきことは、などなど。しかし彼女の返事は簡単に五十年の空白を埋めることはなかつた。

市内の繁華街で私は降りた。別れ際に私は彼女と握手をして、その手の甲に唇を当てた。彼女は嫌がらずになされるままだった。冗談とも本気ともとれるそんな仕草を私はいつもしている。

街の喧騒が私をいきなり包んだ。淫らな原色のネオンが渦のように取り巻いてきた。私はしばし佇んだ。意味のない愚

劣な日常へ戻ってきたという安心感、懐かしさが気持ちよかつた。ゆっくり酒を飲みたかつた。

それから私は院長、久能阿明と二度と会うことはなかつた。

「二」

久能阿明の父、威一郎が留学先にドイツを選んだのは、その頃の社会情勢による。ナチス政権前のワイマル共和国では、世界大恐慌のあとのインフレで人々の暮らしは苦しかった。おかげで日本の少ない円で十分な生活が保証された。またドイツも日本と同じく国際連盟を離脱し、数年後の日独防共協定を目指す友好国だつた。

彼は学問的には、ダーウインの種の起源を読み、それから遺伝学へ興味を持ったのが始まりだつた。留学先の大学では優生学の研究が進んでいた。しかしその分野ではドイツはアメリカとイギリスに後れを取っていた。遺伝によって病気や障害が始まる、それをいかに防ぐかが重要だつた。民族全体の健康を守るためにはその研究が必要とされた。国家政策としてその分野での後進国のドイツは焦っていた。

ナチスが政権を取ると一気にその政策は具体化された。肉体的にも精神的にも不健康で無価値な人間は、子孫にその苦悩を引き継がせてはならない、と言う主張で断種法が成立された。さらに本人の同意なしに国が強制的に不妊手術を行うことが可能になつた。

しかし威一郎はその流れに疑問を抱き飲み込まれることはなかつた。彼のテーマは、その頃日本では死の病氣と言われた結核の遺伝についてだつた。結核に罹る人間とそうでない人間の違いは遺伝子にあるのではないかと言うテーマだつた。また不妊手術を国家の権力で行うことは日本の国民意識には合わないという主張も持っていた。

それでも彼の帰国後、日本でも国民優生法が成立し、断種手術、不妊手術が行われることになつた。常習性犯罪者、狂暴性者、アルコール依存症などだつたがその数は少なかつた。帰国後、威一郎は先祖から受け継いだ山を切り開いて精神病院をつくつた。虚空山病院の始まりである。患者で一番多かつたのは、梅毒末期の麻痺性痴呆と虚言空笑やアルコール依存症の早発性痴呆だつた。並行して結核病棟も作つたが、回復するものは少なかつた。戦時中は捕虜のアメリカ兵の結核患者が何人か入院していた。

威一郎は妻のために病院の近くに、池を見下ろすすべランダのある瀟洒な家を作つた。大きくはなかつたが妻は満足していた。天気の良い日には彼女が池の周りを散歩している姿がよく見られた。

冬の朝の太陽は水面を柔らかな光でさざめかせた。越冬の野鴨が棲みついて終日水面を滑つた。暖かい日は白鷺が優雅な飛行を水面に映した。夏の夕方は遠い薔薇色の空が水面を覆つた。秋には周りの木々が織物のように色づき、春には山桜が水面に浮かんだ。季節に関係なく天気の良い日は青空が

そのまま水面になった。そして夜は濃いワイン色の静謐に沈むのだった。

そこで阿明は生まれた。五歳まで彼は母の乳房を求め、その匂いの中で育った。

やがて戦争が長引き食料不足栄養不足も加わって苦しい病院経営になったが、国としても必要な施設になっていたので生き延びることができた。戦火の恐怖にまみれた軍人や、獄中の拷問で異常をきたした若者も運ばれてきた。精神を病んだ捕虜のアメリカ兵もそこで保護された。

また体力のある患者と共に畑を耕し野菜を育てたりした。

目の前の池の魚、鯉などは結構な栄養分だったが、捕りすぎたためある時は禁漁の時期を決めねばならないほどだった。

やがて終戦になった。敗戦の大混乱の後、地元では一つの陰惨な事件が明るみに出た。九州大学における米兵捕虜の生体解剖事件である。八名の米兵捕虜が生身のまま実験台の上で殺された。片肺切除での生存可能性の実験、海水がどこまで血液の代わりになるか、他に肝臓や脳を切り取る実験も行われた。中心の教授は拘留所で自殺、参加者は看護婦も含め三十名ほどが逮捕された。

取り調べの途中に、虚空山病院での捕虜の死も注目された。戦時中に結核患者の捕虜の米兵が亡くなっていた。結核病菌の研究のために米兵捕虜が実験に使われたのではないかという疑いだった。

院長、威一郎の妻がドイツ人であり、その父親がナチスの

優生保護法と人種主義の推奨の者の教授の一人だったからだ。障碍者たちへの安楽死計画を打ち出したのも彼らのグループだった。また別のグループは双子の兄弟の片方に結核菌を感染させその経過を観察するという実験も行っていた。多くの非人道的な殺人が行われていた。

取り調べで威一郎は嫌疑を否定した。何日も拘束されて、密室での拷問ともとれる取り調べで心身ともかなり衰弱したが、彼は最後まで意志を貫いた。ドイツから届いたレポートを読んで、威一郎がその誘惑に惹かれただろうことは推測される。あるいはその罪を犯さなかったとは、断言できる証拠はない。その真似事が全くなかったとも言い切れない。なぜなら九大の事件が明るみに出でからすぐに、虚空山病院の実験室からは主要な標本や実験器具や手術器材がすべて消え去ったからだ。証拠を消すためなのか、ただ疑われることを避けたかただけかもしれない。一説によると燃えるもの以外は病院の前の池に沈められたという。

心身衰弱の米軍捕虜の一人が解放され退院するにあたって、病院の待遇に感謝したことも院長の取り調べでは助けになった。彼は鍵のかかる保護室に入れられていたが個室を与えられたと報告した。また好意をもった看護婦と別れを惜しんだことから、院長の嫌疑は解けた。

ただそれまでは長い陰鬱な日々だった。威一郎の妻アデレの心は打ちひしがれていた。故国の父の教授は逮捕された。ナチス隊員の弟は戦場で傷つき、半身不随で帰郷していた。

残されたアデレの母は頼る人もなく苦しんでいた。彼女も帰国ができないままだった。それに加えて何日も帰らない夫の身を心配するアデレに、院長の隠し事を暴こうと取り調べは特に厳しく屈辱的でさえあった。

ある夜、アデレは姿を消した。翌朝、彼女の死体が池に浮かんでいるのが見つかった。散歩の途中で足を滑らせたのか、自ら身を投げたのかは分からないままだった。五歳になったばかりの息子の阿明を残して自殺することはないだろうと、誰もが思っていた。

「三」

久能阿明ともう一人の多田幸作が私の親しい友人、文学仲間だった。

彼は日本古典文学が専門だった。万葉集に関しては特に魅入られていた。相聞歌八百六十六首を二年間で全部暗記すると私たちに宣言した。

そして初めて万葉集を説明する時には

朝寝髪われは梳くまじうるわしき君が手枕触れてしものを

を揚げるのが癖だった。昨晚忍んできた男に愛されて、男が帰った後その名残を味わい、乱れた髪をそのままにして、また来てくれるのを待つ気持ちのけだるい朝の女心だ。

続けて彼は説明する。これを初めて読んだ人は誰でも、近代の与謝野晶子の和歌だと思うだろうが、万葉の恋歌なのだ。奈良時代、千三百年前から続く日本人の恋の心だ。人を愛し自然を愛する日本独特の感性は美しい。この時代にこれほどのロマンを歌にした民族はほかにはない。しかもこの歌集は百三十年にわたって編纂されたのだ。そして次々に彼の口から迸るように出てくる和歌で聴く人は圧倒されるのだった。

久能と私も会う度に覚えたての和歌を何回も聞かされた。その解釈はまた面白かった。私もおかげで何首かは記憶した。

稲つけばかかると手が今宵もか殿の若子がとりて嘆かん

莊園の息子の悪ガキが夜な夜な下女のところに来て悪戯する。そして私の手を取ってかじかんで荒れた手を取って、冷たかろう、可愛そうだな、と言ってくれる。多分だれか教養のあるものが作ったのだろうが、その時代が偲ばれる。

多摩川に晒すたづくりさらさらになんぞこのここだけか
なしき

音の響きだけでもだけでも美しい。

多田はその感性の細やかさに反して、体は頑丈で体力にも自信を持っていた。高校時代は柔道に明け暮れていたのに大

学ではすっぱりやめて文学に凝っていた。酒もよく飲んだ。そしていくつか歌を暗唱すると感極まって泣いたりする泣き上戸の気もあった。逆に機嫌がいい時は道化師のようにふざけたりして人気者だった。ある時は腫れあがった顔面を見せたこともある。喧嘩して殴られた、そして負けたので謝った、と屈託なく笑ったりした。

私たちは自分の主張を述べるだけで、相手が理解してくれと信じてただ喋り合うのだった。相手の内容を聞いて理解し、自分の考えの参考にしようなどとは思ってはいなかった。それでもそんな自由な会話でお互いの気持ちを通じて心に残るものは多かった。ただ私たちは将来のことなどあまり語りなかつたように思う。この楽しさがこれからも続くのは当たり前だとでもいうように日々を送っていた。

また彼は一週間も二週間も姿をくまらずこともあった。突然消えて突然現れては旅行してきたというのだった。それもあまり知られていない、何の変哲もない知らない街だったりした。

彼は老いた祖母と二人の貧しい暮らしだったので、年寄りとか子供には優しくかった。祖母は若い時は女学校の国語の先生だったらしい。

その彼が旅行から帰ってきてても、大学の前の喫茶店に三日ほど姿を出さなかつた時、私は不吉な予感を覚えた。

四日目に私は大学から呼ばれて事件の事を知らされた。それはあまりに衝撃的だった。私は一人で耐えきれずに久能を

探した。彼もまた連絡がつかなかった。出来事の詳細を知ったのはそれでもずいぶん後だった。それもどこまでが本当の出来事だったかは分からない。

初めて入ったバーで酔った多田は客の二人と喧嘩になった。店の中で大立ち回りになったので店主は警察を呼んだ。客の一人が怪我をしたので救急車も呼んだ。酔いも相当に回っていたので多田は怪我人と一緒に救急車に乗せられ病院へ運ばれた。照れ隠しに彼はそこでふざけたり、また万葉の歌を声をあげて詠んだりしたらしい。怪我はたいしたことはなく客は帰ったが、多田はそのまま隣接する精神病院へ入れられた。強制措置入院だった。

はじめ面白がっていた彼は次第に真剣になってきたが、そこまでくるともう自由のままではいられなくなっていた。看護人は彼を拘束しようとした。彼はそれをはねのけたが、はずみで看護人は倒れて血を流した。数人の看護人が寄つてきて、彼を押さえつけ暴行を加えた。狂暴な病人を抑えるという大義名分を貰った彼らは、日ごろの鬱憤を晴らすかのように激しく暴行した。凄惨なその現場は誰も知らない。保護室に閉じ込められた多田は翌朝、死体で見つかった。

それは久能の父が経営する虚空山病院だった。

しばらくして会った久能阿明は私とまともに目を合わせようとしなかつた。謝罪しようにもできなかつたのだろう。そして避けるように私の前から去つたのだった。

新聞社などの追求が始まった。記者会見で院長は一応の陳

謝を口にしたが誰も納得しなかった。被害者は二人に怪我をさせた乱暴者であり、看護人たちは正当防衛を主張していた。確かに過剰防衛であったが相手が虚空山病院でもあり、警察も深くは追及しなかった。哀れな祖母は寝込んでいた。

左翼系の新聞はまだ書きたて、学生たちが真の謝罪と賠償を求めて病院の前でシュプレヒコールを挙げた。戦時中の虚空山病院での人体実験の噂もぶりかえされた。朝鮮戦争中はばらばらになった米兵の体をつなぎ合わせて修復する仕事で一儲けしたともいわれた。ついには日本におけるロボットミ―の推進者であることまで暴露された。あの乱暴者はロボットミ―手術でよくなるはずだった、と院長が院内で喋ったとかの噂は誰かが勝手に言い出したのかもしれない。真偽は分からない。

このロボットミ―の手術は、大脳の一部を切り取る前頭葉白質切截術と言われた。精神疾患を外科手術で治療しようとするものだった。世界でも日本でも合法的なものだった。成功例が多いというデータは今では信じられていない。実際には、虚空山病院には何の効果もなかったというより失敗した患者が一人入院していた。感情も思考力も全く失った生ける屍ともいべき人間だった。もう何年もそこで毎日同じ生活をしていった。彼らの治癒は死ぬことでしかありえなかった。

久能阿明は友を失った悲しみと看護人への怒りと父の病院であるという恥辱でしばらく部屋に閉じこもって動けなかった。そしてついに意を決して父に会いに出かけた。

威一郎は妻のアデレを深く愛していた。孤独な留学生時代に味わった甘いアデレとの口づけは年を経るごとに深い思い出になって彼の心をさらに安らかにさせた。また年毎に可愛らしくなる阿明がひと時も母のもとを離れようとしなないことにも、その二人に対する愛情が深まるばかりだった。暗い戦時下の憂鬱な日々も彼は乗り越えた。戦争が終わったら阿明を連れて帰国するアデレについていく事が、目の前の確実な事に想像できた。ここまでくればアデレの両親も歓迎してくれるに違いない。そして青年になった阿明が病院の跡継ぎになる前に、彼もドイツに留学させねばならないだろう、と思うことがまた一段と彼の心を晴れやかにさせた。

だが敗戦とアデレの不幸な死は計り知れない苦しみだった。彼女のその時の不安や苦しみをなぜ自分が十分に感知し守つてやれなかったのか、彼は自分を責めた。足を滑らせて池に落ちたとしても、彼女は不安に怯えながら歩き、自分の助けを待っていたはずだ。冷たい水を飲み込み呼吸が苦しくなっていくとき、自分の名前を呼んで助けを求めていた時、自分は何をしていたのか。最後に彼女が見たものはただの汚れた黒い水だったのだろうか。

母親を探して泣きわめく阿明にも彼は自分の姿を見た。

葬儀は自宅で執り行い関係するもの以外は誰も寄せ付けなかった。棺桶の蓋は閉じたまま死に顔を誰にも見せなかった。火葬する前の夜、彼は何度もその死に顔に口づけをした。そ

それは温かく昔のままの匂いがした。それから人前で平静を保つていても、夜中はベッドの中で涙を抑えきれない日々が何日も続いた。

仕事に熱中するしか生きる道はなかった。友人の勧めでアメリカにロボトミー手術の勉強に行つたのもその頃だった。

対象は狂暴性依存者やアルコール依存症、一日中大声を出して叫び続ける者、不可思議な患者が多かった。手術の後感謝する家族もあつたが、多くはそのあと人格を失くした人生を送つたようだ。ロボトミーは大学でも行われるようになっていった。忙しい仕事は威一郎を立ち直らせた。病院の経営は順調だった。

阿明が十歳の時威一郎は若い冴子と再婚した。

十八歳になつた阿明はその頃父を嫌い家を出ていた。そして病院の跡継ぎを断り医学部に進学せずに文学部へ入つた。

威一郎は落胆した。跡継ぎの事は別に考えるにしろ、阿明を見るとやはりアデレの面影が蘇つて心を揺さぶられるのはどうしようもなかった。

阿明が父の家を訪ねたのは、初夏の夕暮れ時だった。父は所用で出かけ二、三日帰らないということだった。義母の冴子が応対した。彼女に会うのは三年ぶりだった。歳も四十代の中頃のせい、少し太り気味に見えた。懐かしさ以上のものが阿明の心を突き上げた。父に会いに来たのにその不在にふと嬉しさを覚えた。

居間は彼が家を出た時と何も変わっていない。敷物もソファも壁紙も同じだった。マントルピースには父の気に入りのアフロディテーの木彫りの彫刻のついた置時計や、ガレ風の花瓶が昔のまま置いてある。薄絹を腰に巻いた裸体の女神の左手は時計の上部の丸みを抱き、反対側を立つたライオンが支えている。アフロディテーは墨で塗られて黒い。反抗期だった阿明がいたずらに塗つたものだった。父は怒らずそのままにしていた。阿明も知らぬ顔をしていた。昔と変わらぬ壁の絵はノイシユバンシユタイン城の遠景だ。

日が落ちる前の夕闇が近づきつつあつた。シンブルなシャンデリアはまだ灯っていない。池に向かつて開け放されたガラス戸はそのままベランダへ続いている。それはかつては白く輝いていたのに今は塗料が剥げて古ぼけている。池の水面はほんのりと明るい。

もう火を消して二か月ほどになる暖炉は、まだその暖かみの気配を残しているが、殺伐としている。幼い阿明は、まだ五歳にもなっていないが、彼はその温かい暖炉の前で玩具を転がしながら遊んだものだった。そこにはまた、それよりも暖かな母の膝や胸や腰があつた。母は何もせず阿明はその視線だけを浴びていた。

阿明の母の思い出はそれしかない。ぼんやりと安らぎの空間に包まれている感触は残っているが、詳しい母の仕草や息吹の記憶はその後の喪失感のうちに危うく消えていってしまった。

今その暖炉の前のソファに義母の冴子が紅茶を注いで座っている。

阿明は煙草に火をつけるとマッチの燃えカスを紅茶の受皿に無造作に置いた。きれいな皿だった。冴子はそのままにしていた。無作法になんでも我儘にしていよいよ、灰もどうぞいよいよ、というように無言のままだった。

柔らかなスリッパから伸びる素足は白磁のように白く滑らかであるにもかかわらず、その中に流れる血の色は彼の視線を吸い込もうとしていた。彼は薄いベージュのワンピースを通してその腰から胸を感じ、顔へ視線を移した。それは彼の視線を軽く受け流しながら素知らぬ顔をしていた。彼はその表情が美しいと思ひ凝視できなかつた。それは悲しみになつて彼の胸に鋭く突き刺さつた。それは怒りとなり憎しみにもなるうとしたが、弱い力でしかなかつた。

阿明が十歳の時に家に来た新しい母に違和感を覚えるのは当たり前だったが、その優しさにすぐに馴染んだのも仕方がなかつた。冴子は柔和で決して怒らず、五年も大人の女性に触れていない彼が逆らう意味も力もなかつた。抱きしめられるときの柔らかな体と包み込む匂いは彼が逆らう氣力を失わせた。だが最初の頃はまだ思ひ切つて甘えることはどうしてもできなかつた。また彼自身も性の芽の疼きを自覚し母の女性を感じ始めていたころでもあつた。

あれは新しい母が家に来て一年も経つていただろうか。あの夏の夕べ、風呂上がりの浴衣の母の後姿に思はず抱きつい

てしまったことがある。まだ背も低かつた。優しい母への子供の甘えの表現だった。そのふりをしているのかもしれない。

母は阿明が心を開いて自分に甘えてくれたのだと思つてあやすように微笑んでくれた。子供として抱かれるのと自ら抱きつくというのはその感触は違う。その夜彼は初めての夢精をした。

それからの彼は罪悪感に苛まれた。それは亡き母に対する後ろめたさだった。母を裏切つたのだ。冷たい水に沈んでいきながら、苦しみの中アメイ、アメイと自分と呼んだに違いない母。夫はなぜ助けに来てくれないのか。美しかつた金髪は腐つた水草のように水に流されて行く。その悲しみを忘れるため、亡き母の苦しみを安らかにすること、それは断罪として新しい母を憎む事ではか叶えられなかつた。

歳と共に自分の顔の彫りが深くなり白くなり髭が生えてくるようになる、ますます彼は自分の意志を確かめる事ができた。母の一つ一つは覚えていない。だが明るい光が良い匂いをさせて彼を包んでいた記憶は決して消えることはないはずだった。赤子の自分は素裸で、玩具を手に取り母に呼びかける、暖炉の前のほんのりとした暖かさ。

かといつて義母の冴子の温かさはまた別にあつた。それは春の嵐に吹き荒れる花弁のように色鮮やかで、暖かつた。禁断の甘い匂いに阿明は落ち込んでいきそうでもあつた。彼はそれを拒否する努力を覚えた。そうしなければ母アデレの冬の静かな暖かさは無情にも押し流されそうだった。

彼がまだ十五歳ころだつたらうか。暖炉を囲んで三人が座つていた記憶がある。退屈なそれでいて平穩な夕食の後のくつろぎの時間だつた。冴子が暖炉の火をかき混ぜ、そのまま立つて、木彫りの置時計を撫でながら言つた。

「この時計は美しいわ、この彫刻の素敵な事、アデレさんが好きだつたことがよくわかるわ」

前妻のアデレを褒めるつもりで無理にお世辞を言つたのだろうか。

その夜、阿明はアフロデイトの像を墨で黒く荒々しく塗つた。それは誰も何も言わずそのまま置かれていた。

義母を嫌い、生母を裏切つた父を軽蔑するしか彼の道は残つていなかった。そうやって彼は煩悶の数年間を過ごした。

父とも疎遠になつて家を出た。当然医者になる気はなかつた。「昨日、お父さんと一緒に多田さんのところへお託びとお見舞いに行つたわ、そして相手の弁護士さんと相談して、出来る限りの保証をすると、約束してきたの」

阿明は氣勢をそがれた。そして秘かに思つていたことをついで言葉にしてしまった。もう一度大学に入りなおす、医学部を受ける。医者になる。父の後を継ぐかどうかはまだ決めていないが、たぶんそうなるしかないだろう。

冴子の気持ちを和らげようとする自分を、阿明は口に出してから恥じた。冴子の微笑が彼の緊張を解こうとしたので彼は慌てて眼をそらした。

帰る前に阿明はベランダへ出た。夕日の残滓が水面に落ちていた。しばらく佇んでいた。池からは何か聞こえそうだったが、何も聞こえなかつた。それから池はすぐに闇に包まれ黒い光を放つた。

阿明は姿を消した。

「四」

十五年後に阿明は帰つてきた。医者になつた後、二つの病院に勤務して研修を重ねた。父は喜んで、彼を迎えた。しかし彼には故郷へ帰つてきたというたの懐かしみの笑顔しかなかった。仕事への情熱や志すものはいしてなかつた。ただ気になることがいくつもあるだけだつた。

学生時代はよく勉強した。友人との付き合いも普通通りにこなした。文学を語る友人は避けた。ドイツ文学には母の香りが漂い、その都度それを覆つて誘惑しようとする雨雲のようなもの、その義母の影だつた。遊興の友人たちが気楽だつた。

彼の容姿は女性たちに歓迎された。彼は淫靡な界限に入り込んだ。それにしばしば没頭した。雑念を払うにはそれしかなかった。いや雑念と言うにはあまりに深い葛藤の悲しみを内包していた。

初めての病院で事件に直面した。親しくしていた先輩医師の起こしたことだつた。生まれつきの重度脳性麻痺の青年の

安楽死事件だった。青年と言つてもまだ幼児と言つてもよかつたが、彼は末期癌の痛みで苦しんでいた。母親に懇願されて先輩医師は考え抜いた末、点滴に禁止の薬を注入した。母親は感謝した。しかし看護師の一人が密告した。院長は隠べいをしようとしたが外部に出るのは早かつた。医師は逮捕され裁判になった。阿明は裁判を見届けることなく病院を辞めた。あまりに考えることが多く深すぎて彼には耐えられなかつた。重度障碍者だから問題になつたのか、そうでない人間の場合はさらにどうなるのか、許されるのか、許されないのか。必ず答えを出さねばならないのか、それすら考えつかなくなつた。

だが二つ目の病院では他人事ではいられなかつた。古い学会誌を繰っていると、父の虚空山病院の記事に出会つた。六年ほど前の学会で問題が大きくなつたロボトミーの事だった。それ以来ロボトミーは行われていない。父は糾弾されていた。二十歳の大学生だった女性は、幼い頃から父親に厳しく育てられた。物心つく前から、女性は人前で決して肌を見せてはいけないという変質狂的な父親の言いつけを守らされた。母親も逆らえずに同調し、彼女は鬱積した心のままで育つた。ある仲間たちとの飲み会で、酔つた彼女は突然丸裸になり踊りだした。みんなは噓し立てた。彼女は人気者になり彼女は解放された気になつた。それを知つた父親は激しく娘を叱責した。ある夜中、目覚めた彼女は丸裸になり、近所を叫びながら走り回つていると保護された。

両親は手術を承諾した。この手術は成功したのか。それ以来彼女は大人しくなつた。ただし大学はやめた。知能が幼児に戻り進歩もなく体だけが老いていった。家族は費用だけを出して彼女を入院させ見捨てた。病院を追求することはしなかつた。他に数件の手術が行われたが治療効果はあつたのかどうかは記されていない。

阿明は父が哀れに思えてきた。順調な仕事ばかりではないだろう。幼児のようになって、感情も思考力もなくして老いていく女性。病院には隠された安楽死もあるのではないか。沢山の失敗や揉め事を抱えて父は一人孤軍奮闘しているだろう。

そして何年も帰らない故郷。悲しみの母の面影。彼は決して自分を弱者の味方の人道主義者などと決めたりしなかつた。ただそこへ帰つていつて、そこに立ち周りを見つめてやらねばならないと自然に感じたのだつた。

院長の父は歓迎した。

阿明は慢性期病棟の長期入院患者に多田の祖母の名前を見つけた。寝たきりの彼女は八十九歳で言葉も出ない。意識も薄かつた。寝顔は安らかに見えたが、その中に殺された孫の事や孤独で二十年も過ごして来た悲しみを内包していると思つと、阿明は悲しかつた。

これまで何人もの患者の死を見届けてきた。物体である肉体の機能、命の灯が消える。それに伴つて精神も消えるのは

明白である。だが肉体が残り、精神を全く喪つてしまつたら人間はどう生きるのか。長い間を精神科病棟で過ごす患者は多いが、彼らとて精神がどこかでくい違つただけで、普通の軌道に戻ることはある。そのずれた軌道に反抗して患者が感情を露にすることは普通であろう。

ロボトミーの後の女学生は精神科病棟にもう十年以上入院していた。彼女が何時か俗界に復帰して生活することはできるのか。あるいは風邪一つひかず、肉体健康のままここで生きていくのか。

阿明は元女学生を診た時、その反問に結論を出しえなかつた。医学的にはそれが人間だ、と断定するだろう。彼女の生きていく意味は何か。その意義、価値はなにか。

肉体的には三十歳を過ぎた立派な女性だつた。身についたものだろうか、仕草も動きも入院着の乱れもなくちゃんとしている。ただ質問にはただ、ウン、と答えるだけだ。真つすぐ阿明を見ているが瞳には映つていない。ちよつとおどけてあやそうとすると、わずかに頬が緩む。整つた顔は美しい。言葉を発することはない。

勉強が足りない。結論は先だ、と思うしかなかつた。

院長は年寄りの精神科科長を交代させ阿明を科長にした。一年後にはもう一人の外科系の副病院院長と共に、副院長に抜擢した。初めは不満を言うものはいなかつた。

しかし次第に阿明は我儘になつてきた。父はその我儘を拒

否しようとしなかつた。できなかつたのかもしれない。経営上は精神科は収益もよく、公の機関からも信頼され、市中の評判も良かった。八十歳に近い院長には大切な後継者だつた。理事会では度々その副院長とぶつかつた。彼は虚空山病院のこれまでの発展に十分に貢献してきた。院長に自分の意見を通すことになんの躊躇も持つていなかった。院長の信頼も深かつた。父の院長は阿明の意見を尊重したが、実際の病院運営に関しては副院長の意見に加担することが多かつた。

ある年の理事会で、新しい手術場の増設と最新式のCTを導入する提案がなされた。手術の依頼は年々増え、その成功例はさらに次の先端医療の成功を要望されていた。病院経営上も大学の協力もそれは必然に思われた。近くの住民も期待していた。

阿明は反対した。深い意味はない。ただその予算を古くなつた精神科病棟の建て替えに使いたかつた。厳しい世情のせいもあり患者の増加に比して病棟は不足していた。また衛生設備は特に古く、空調は効かず空気は常に澱んでいた。先端医療と言つても国立や官公立の施設は十分にある。そこに任せればいい。その下支えで民間の施設は役を果たす。

何か月も理事会では決定されず、討論の中で、阿明は自分の考えにさらに固執していった。最初は副院長の儲け至上主義的な提案に、父も賛成していたのに納得できずに反対したに過ぎなかつたのだが、時間と共に考えが固まつていった。

精神科病棟の新築に加えて、長期療養病棟の改築、ホスピス

病棟の充実、養護施設、など彼の提案は広がっていった。安っぽい博愛主義者だ、と言う副院長の陰口も聞こえてきたが、それがさらに阿明の意見を強固にさせた。

院長は理事会ではあえて阿明の意見に同調しようとしなかった。院長の一番の理解者であり一番の信頼を得ている副院長の実績は誰もが納得していたし、病院への貢献度が高いのも実績が示していた。次の院長兼理事長に相応しい立派な医者だと誰もが思っていた。

父は阿明を説得しようとしなかった。表立って副院長の意見に賛同もしなかった。心労から体調も思わしくなくなり気力も少なくなっていた。阿明は自宅に父を見舞うことはなかった。そして一日の多くの時間を病院で過ごした。

その冬、父威一郎が急逝した。風邪をこじらせていて用心していたが、突然肺炎を起こしたのだ。入院してからは短かった。外科の副院長はつきつきりで威一郎を診ていた。阿明よりもその時間は多かった。風邪が長引いたにも関わらず、ある夕べ、彼は長い時間ベランダで車椅子のまま池を見ているらしい。その夜高熱に見舞われ緊急入院した。

葬儀は病院の講堂で執り行われ、事務長が取り仕切った。その後しばらくして副院長は病院を去った。

葬儀が終わって二か月ほど経った蒸し暑い春の夕暮れ時だった。阿明は自宅を訪れた。葬儀ではほとんど声を交わさな

かった冴子に会うためだった。喪の着物の彼女は彼の胸を衝いた。二十年ぶりになるはずだ。すこし乱れた髪に薄化粧はかえって艶めかしかった。彼は慌て眼をそらしたが、その腰に眼が行った。正確に彼女の歳を計算している。六十五歳になるはずだったが、長い間想像し彼を苦しめたその腰の美しい線はそのままだった。

玄関の石垣に蛇が長々と横たわっている。石の冷たさが心地よいのだろうか。何の迷いもなく彼はそばのブロックを持ち上げて、蛇の頭に打ち付けた。それは体を渦のように丸くねらせて溝へ落ちた。彼はもう一度気を引き締めた。

部屋の空調はあまり効いていなかった。薄手の普段着の冴子は気にならないようだ。こうやって向かい合って座つたのはまさに二十年前の事だ。壁の絵も壁紙も、棚の置物も何も変わっていない。廃墟のようになった暖炉が痛々しい。マントルピースの置時計はそのままにおかれている。女神を黒く塗つた墨は長い時間を経て剥けてかすれている。

二十年前の光景が蘇る。彼女の薄いワンピースと白い脚。あの時は開け放したガラス戸から池の黒い水が見えていた。その時と同じ紅茶茶碗。部屋は古くなっていない。二十年間、蘇つては彼を苦しめた部屋の最後の時間のままだ。

しかし今は、冴子は老いているが、それまでの期間を阿明は自分と共有していたような気にもなった。胸元の白さと首筋のほつれ毛はそのままだったような気もする。それもまた深夜目覚めると、水に浮かぶ藻のようになって彼に纏いつき

苦しめたものだった。

池の対岸は家が建つたのだろう。水面に光が流れてきて揺れている。

阿明は昔のようにわざとマッチの燃えかすを紅茶の皿に置いた。彼女はあの時の無作法を覚えていられるだろうか。

彼女が立ち上がって明かりをつけた。途端にガラス戸は黒い水を背景に鏡のようになった。そこに映った自分の顔を見た彼は一瞬啞然とした。情念を抑えきれずに燃え上がる炎のような表情だった。昔猥雑な界限でたまたま鏡を見た自分の表情が思い起こされた。ただ今はそれが硬直している。

カーテンを閉めてください、と彼は思わず言った。

彼は思考力を失って混乱した。そのカーテンは遠い地方暮らしの部屋と同じ濃いベージュ色をしていた。長い間同じ色を見慣れていて忘れていたのだ。この部屋と同じ色だった。その部屋で彼は何人もの女性と暮らしては別れた。中には冴子に似ている女性もいた。その体を食ったことが思い出される。しかし少しも愛情を感じたことはなかった。

ウイスキーでも出しましょうか、と冴子が言った時、彼はかろうじてそれを断った。

「今日はこれからの相談に来ました」

彼女の表情がふと緩んだように見えて、彼は慌てて次の言葉を急いだ。

「できればこの家を引き払ってもらいたい」

彼の喉は乾ききつていたが躊躇せず淡々と言った。いつか

後悔することがあってもそれに耐えるという決心は変わらない。耐えられない悲しみは残るだろう。

「そうね、いつかはそうなるとは思っていたわ。貴方とこの家で暮らす事も考えないではなかったけれど。この家は、アデレさんの・・・」

「貴方にその言葉は出してほしくない」彼は遮った。名前と言わず、あえて言葉、と言った。

それから沈黙が長く続いた。

冴子の眼は少し涙で濡れた。それを拭く仕草の美しさが阿明の胸を張り割けるように打った。一言、決して出してはいけない言葉を吐きだしそうになった。だがそれには耐えた。これはもう自分の最後の覚悟だ。そう思うことが彼の決心の強さをさらに強固にした。

「父さんの遺産、貯金はすべて持つていってください。結婚して僕はこの家に住みます」

その嘘がやつとだった。

その夏の初めに阿明は家を取り壊した。ただの空き地になった跡はすぐに雑草に覆われた。彼はアデレと父のお気に入り黒いアフロデイトーの置時計とガレの花瓶を池に沈めた。

「五」

私は三年前の大腸癌の治療の苦しみを思い出したくなかつ

たが、それは折に触れて蘇ってきた。二度にわたる手術と抗がん剤の嫌な味とその間の倦怠感。おまけに途中で転んで足首を骨折し、治療が中断したため治療の苦しい期間が延びたのだった。それから酒も断った。

今は前立腺癌の検査をしているが、どこのクリニックへ行っても値が正常と異常の間ということなので結論は出なかった。医者は大病院へ行つて精密検査をするようにと勧められた。だけだった。

私は躊躇していた。思い出す入院、検査、治療の面倒さと苦しさ。私にはそれを報告する相手も、苦しみを分かち合う者も、治療が終わつて喜んでくれる親族も友人も誰もいなかった。その煩雑さと死への不安を一人で耐えねばならなかった。また再び三年前の苦しみと不安に苛まれたくない。そして死への不安に怯えるよりはその煩雑さを思い切つて捨てて、死んでいく事だと、思つたりしていた。

久能阿明に五十年ぶりに再会してから、また彼を訪ねようにも特別な用事はなかったし、私も日々の煩悶のため連絡しないまま一年が過ぎていた。一度電話をしたこともあったが、出張で不在ということ冷たく告げられ、再び掛ける気も失った。

その二か月後私はまた電話をした。やはり同じ応答だった。私はすぐに総看護師長を思い出しそちらに回してくれるように頼んだ。返事は、院内には居るのだが忙しくてつかまらないう、ということでもまた終わった。

私は不愉快になるよりは、何か普通でないことがあると思つた。

その後、二か月ほど経つて私は病院を訪問した。受付を通さずに五階の院長室へ向かった。不在であればそれから受付に行く。しかしエレベーターで五階に上がり院長室へ向かうとしたが、その廊下が防火扉で閉ざされているのを見て愕然とした。

私は総看護師長に会うことにしたが、受付でまた忙しいと言つて断られるかもしれない。私は勝手に院内を歩き回り総看護師長室を探した。そしてその入口の見える廊下の隅の椅子に隠れるようにして座つて、彼女が現れるのを待った。仕事が終わるまで何時間でも待つつもりだった。

夕方七時くらいだった。彼女が部屋に入り私服に着替えて出てきた時に私は声をかけた。彼女は一瞬驚いて私を見たが、その顔は急に悲し気に歪んだ。私はとぼけて、お食事でもどうですか、と言つた。彼女は拒否しなかった。

「六」

阿明先生は一か月前にお亡くなりになりました。貴方にお知らせしようにも、連絡先をお伺いしていませんでしたものから。威一郎先生は私の恩人であり、阿明先生は尊敬する心のよりどころでした。

遺言通りお葬式は簡単にして、言いつけ通り骨壺を池の真

ん中丁度に沈めました。月が水面に映って綺麗な夜でした。真つ黒な水に純白の骨壺が沈んでいく様は、月の光が水底まで差し込んでいくようでした。

戦時中は私の母は病院の営繕部で働いていました。婚約者だった父は志願して大陸へ行ったまま音沙汰はありません。

一歳の私を抱えて苦勞する母が何かの折に威一郎先生の目に留まり、同情して仕事を与えてくださいました。おかげで看護婦さんたちの宿舎に住むこともできました。

私の記憶ではありません。母の話の通りです。

看護婦さんたちにもあやされてしばらくは平穩な時間でした。父の戦死の通知が来て、母はかなり悲しみましたが日ごとにくしくなっていく世情や日々の忙しさで母は氣丈に生きていました。

ある時、母は威一郎先生と呼ばれ、ご自宅の家政婦になるように言われました。物置を改装して、部屋も作ってもらいました。お風呂は病院へ行きました。それでも母娘には十分すぎるほど広い立派な部屋に思われました。

奥様のアデレ様が時々ホームシックになる、友人もいないし家事を手伝いながら話し相手にもなってくれ、昔少しは日本語も勉強したこともある、勉強にもなる、とのことでした。

アデレ様は奥様でもありながら、まだお嬢さんのように綺麗でした。金髪で眼は黒く小柄だったのでさらに可愛らしく見えました。煩わしい家事は母がこなし、お料理とかお菓子

つくりとかを二人でやっているうちに、アデレはもとのままのとおり明るくなった、と威一郎先生から感謝されたそうです。

先生がお仕事から帰られた時のアデレ様の喜びようは、まるで何日も親に会わなかった幼児が喜んで甘えるようでした。先生も嬉しそうでした。

アデレ様はこの家がたいそう好きでした。毎朝、ベランダから池の鯉に餌をやっておられました。自然の鯉なので黒く大きく、餌を食べる時の勢いは激しく折り重なって寄ってきました。そして大きく口を開けて餌が投げられるのを持っている。アデレさんはその中の何尾かに名前を付けた、それを鼻根にしたりして楽しんでおられました。

池の周りの散歩も好きでした。山桜が何本もあったので、ちよつと上つて枝を折つて持つて帰つてきて、ご主人から危ないよと、たしなめられたりしていました。初夏の池の周りの新緑は燃え上がるようで、秋は樫や楓などが色づいて綺麗でした。冬は赤い実をつける餅木など、国にない樹々を楽しんでおられました。

また斜面の雑草の中に混じつて咲いている初夏の姫百合や、秋の薄や名を知らない草花もお好きで、散歩から帰るといつも何かの花を手にしておられました。

変わった思い出とすれば、アデレ様は蛇がきらいでした。池の周りに蛇がいるのは仕方ありません。ある時、じつと石壁を見つめられているのを見つけ、何をしているのか聞いた

ことがあります。そんなに大きくはないけれど、蛇が一匹壁に張り付いていました。そして、慣れて怖くならないようになるまで見つめている、と答えられた時は私も大笑いしました。その通りにそれからはそんなに気にならないようになられたのは、お茶目で気の強いところもおありになったのです。

戦争が始まって阿明様が生まれました。世間の緊張とは別に、あれほどの悲惨な戦争になるなど感じないほど、ここは平穩でした。赤ん坊を真ん中にしてお二人は暖炉の前がお好きでした。阿明さんはひと時もお母さんの傍を離れず、ご両親も阿明さんが火傷をしないように傍にいる。威一郎先生も時にはソファを降りて、絨毯の上に長々と寝そべったりされていました。よほどリラックサされていたのでしょう。

敗戦でそれらの幸せな時間は一度に壊されました。威一郎先生にも苦難の不幸が襲いかかりました。突然アメリカの憲兵のような人が来て威一郎先生を連れて行きました。何かの罪があったのでしょうか。先生は何日も帰られませんでした。アメリカ兵の取り調べは激しいものだったのでしよう。怖くても体調を壊しても逃げることはできません。病人のように憔悴して帰られてもあまり口は開かれません。

その鬼のような手はアデレ様にも襲つてきました。ひどい取り調べと屈辱的な追及でした。アデレ様の国のご家族の不幸も伝えられてきました。身体も衰弱し悲しみと不安で表情が暗くなつていくアデレ様のそばで私が一晚中過ごすことも度々でした。それは数か月も続きました。

そしてついに恐ろしいことが起こりました。威一郎先生は帰つてこられず、私も戦争未亡人の会合に呼ばれ、昼から出かけていました。夕方戻りますとアデレ様の姿が見えませんでした。だんだん暗くなつてくる。

私は心配で病院の夜警の人に頼んで一緒に池の回りを探しました。遠くに行かれるはずはありません。一晚中探しました。明け方、朝日に照らされて池に浮かんでいる金色のものをを見つけました。アデレ様の頭髮でした。

つらいからと言つて決して自ら身を投げることはありません。帰つてくる威一郎先生のために、花を摘みに行つて足をすべらせたのでしょうか。そして愛する息子の阿明さんをおいて自死することはありません。

威一郎先生のお嘆きはあまりに深くもう説明できません。阿明さんは泣きじゃくりながらお母さんを探して部屋中を回っていました。五歳になったばかりでした。ほとんど四歳になるまでお母さんのお乳をしゃぶつておられたのですから。阿明さんが少し乳離れをし始めたのは、娘と遊ぶようになったこの一年でした。私たちの離れたのは、娘と遊ぶようにするのが楽しくなつてからです。娘は阿明さんより二歳くらい年上でしたから、二人は相性が良かったのでしよう。それに眼がくりくりして可愛らしかった。玩具を家から持つて来て、こちらで遊ぶことも多くなりしました。アデレ様が亡くなつてから私はいつもそうするようにしました。食事もこちらでとるようにして、次第になれるようにしました。夜はこちらで

寝ていました。威一郎先生はそれに安心されていました。私には姉と弟の子供ができたようでした。

お父様に呼ばれても緊張して出て行き、私の部屋に安堵して帰ってくるようになりました。思い出の部屋が懐かしく、それが苦しいのだと私にはわかりました。ただ阿明さんは意識しておられなかったと思います。

それでも威一郎先生は落胆から抜け出し、仕事に熱中されるようになられました。アメリカに行つて新しい医学を取り入れたり、病院を広げられたりされていたので不在が多く、阿明さんは私の子供になったようでした。

阿明さんが十歳の時威一郎先生は再婚なされました。まだ四十歳前の綺麗な優しい人でした。冴子さんと言われました。阿明さんも次第に新しいお母さんに慣れていかれました。なるべく家にいるように言いつけられ、それを守つたのも冴子さんが優しい人だったからです。娘にも優しく、阿明さんとお菓子を平等に分けてくださったりしました。二人は一緒に嬉しそうに食べていました。

ただ阿明さんは時を見ては私たちの部屋に来ていました。そしてまるで主人のように威張っていました。私たちがそうさせてしまったのですが、それはまたどちらにも嬉しい事でした。だんだん我儘になり、ときには癩癩を起したりなさいました。小さい時は玩具お壊したり、目の前のものを投げつけたりでしたが、私たちはむしろそれを面白く見ていました。大学に入ると家を出られました。それは普通の事でした。

娘は二歳年上だったその時は看護学校を出て、他県の病院に就職していました。しばらくよそで経験して、いずれ虚空山病院へ帰るつもりでした。

娘もいないし阿明さんもない。家事は冴子さんがいるので私は部屋を出ることにしました。まだ働けるので寮の部屋を借りて、また営繕部へ戻りました。

私の話をします。私と母が離れに住んでからしばらくして阿明さんが生まれました。私は二歳だったので覚えてはいません。覚えているのは私が五歳くらい、阿明さんが三歳か四歳の頃です。弟のように遊んであげていました。一緒に母屋に行くこともありましたが、阿明さんは私の前でお母さんに甘えて、私に気づくとちよつと恥ずかしそうになったりしました。アデレ様は綺麗で優しく、阿明さんの甘える姿を見ると、私も部屋に帰つて母に甘えたりしたものです。

アデレ様が亡くなった時のことは忘れられません。お母さまが亡くなったのを知らず、泣けばすぐに現れて来るとばかに泣きわめいておられました。それがだめで家中を表から裏まで、全部の部屋を泣きながら探していました。亡骸は見せてもらえず、皆にあやされてついには疲れ果てて私たちの部屋で眠りました。それから続けて私たちの部屋で過ごされました。母と私はアデレ様の死を悲しむ余裕もありませんでした。阿明さんにかに不幸を忘れさせ、落ち着かせるかということを考えるだけで頭は一杯でした。母と二人で必死で

した。

ある時阿明さんの表情がふと変わりました。今もその表情を思い起こすと私は涙がでてきます。どうあがいてもどうにもならない、希は決して叶えられない、そんな絶望の表情のように見えました。悲しみと諦めの眼、そしてその奥に何か強い光、決心のようなものさえも感じました。もちろん本人はそんなことは意識していません。しかし今思うとその時の眼の奥の光はずっと阿明さんに残っていたのだと思います。

五年ほど私達の姉弟のような関係は続きました。幼い頃はままごと、お医者さんごっこなどは私の言うままでした。お父様は不在でも阿明さんが私たちの部屋にいれば、安心なさがありました。それも小学高学年になるとなんとなく恥ずかしくなり、少し疎遠になりました。新しいお母さんが見えてからは部屋に来るのも少なくなりましたが、来られるたびに大きくなるようでした。

高校生の頃は、会うのも本当の姉弟のようにはいかず、恋人と言うにはちよつと違ふ、お互いの気持ちはわかつていても必要以上に近づけませんでした。私は看護学校にはいり、勉強や友人たちと楽しい時間を過ごしました。そして卒業して他県の病院に勤めました。

母が時々連絡をくれました。阿明さんが大学を止めて、どこかの地方大学へ入りなりました。それ以来音沙汰はないとのことでした。

私はある男性と恋をして何年か一緒に住みましたが別れて、何年後かにまた別の男性と住みました。そしてまた一人になりました。

阿明さんが立派な医者になつて病院に帰つてこられたと聞いた時、私はもう四十歳近くなつていました。阿明さんから帰ってくるようにと連絡があつたのは、それからしばらくしてからです。私は虚空山病院の仕事につきました。

威一郎先生は七十歳半ばだったのでしょか。随分老けておられました。が柔和な老人という風でした。ご両親もとても喜んでおられました。阿明さんはそれでも滅多にご自宅には行かれなかつたようです。

これからは阿明先生と言います。十五年ぶりでした。帰つてこられた時は少し憔悴されていたのでしょか、お会いした時は背が伸びた感じはしましたが、少なくともかっこいい若い医者という風ではありません。けれど顔は痩せて彫が深くなられても体の芯には何かあるということが私は分かつて安心しました。半分人生に自信を無くしかけた私でしたが、やはり先生と仕事ができるのは嬉しい事でした。

ある時、寝たきりの患者さん、相当のお歳のおばあさんのベッドに連れていかれました。そしてこの人が、先生の学生時代の親友のお祖母さんということを知りました。親友が亡くなったその事件の事は母から聞いていましたのですぐにわかりました。身寄りもなく、こんな孤独のまま死んでいくの

は自分のせいだとも言われました。もう何十年も苦しみだけを抱えて、ただの肉体として生きている、悲しみと思いのほかに生きがいを持って生きておられたのだろうか、自分出来ることは安らかに死んでいかせることだけだ、と言われたのです。いくらその先の時間がないからと言って、医者が患者さんに、死んでいかせる、そんなことを思っていないのでしょうか。けれども先生のその言葉に私はなぜか違和感を覚えませんでした。私は先生の希望通りにそのお祖母さんを毎日診に行きました。

しばらくしてお祖母さんは亡くなりました。先生は延命措置はせず、手を握ってお祖母さんを診ていました。最期の時お祖母さんが薄目を開けて先生に微笑んだように見えました。もう一人は、精神科病棟のまだ若い綺麗な女性でした。身なりも仕草もきちんとしていました。節子さんという名前です。それでも先生に前の座ると、赤子のような笑いを見せるだけで言葉は出ません。身体は中年でしょうか。節子さん、と先生が話しかけるとただ嬉しそうな表情を見せるだけです。あとで先生がロボトミーという言葉を見せてくださいました。学生時代にその言葉は習ったかもしれませんが、よく覚えていません。先生は言葉を教えただけで他の話はされませんでした。私はこの患者さんへの先生の気持ちというか、考えを聞きたかったのですができませんでした。私も何を考えて良いかわかりませんでした。

その頃、病院は大きく発展していたようです。腕のいい評判の外科の副院長が随分貢献されていました。威一郎先生も次の院長兼理事長にと考えておられたようです。大学からも優秀な医者を連れて来られていました。

副院長が次に連れて来られる予定は脳外科の先生でした。それで脳外科の手術場を作り、新しいCTを入れる計画も持っておられました。これで実績を作り、数年後は今スウェーデンで研究されているガンマー線治療器を入れる。これは開頭せずに脳内の病巣を消滅させることができる。多分これは高価なので九州では北と南に一台ずつ設置されるだろうし、そうなればここは大学に並ぶ病院になる。少なくとも脳外科に関してはトップになるだろう。

威一郎先生もまんざらではなかったようです。そうなれば自分は安心して引退できると思っておられたようです。

日々の仕事で少しずつ生氣を取り戻されていた阿明先生がそれに反対されました。誰もが驚きました。威一郎先生は悩んでおられました。阿明先生は精神病棟の改装、いや新築移転を主張されました。病院の主体は精神科でしたし、当時は収益も多かったのです。然し病棟は古く設備もよく機能していません。例えばいくつかの空調は古く故障ばかりで夏は扇風機、トイレの下水はまだです。それに大部屋ばかりで、患者さんはただ詰め込まれていました。理事会ではなかなか結論が出ませんでした。その頃は阿明先生の仕事ぶりから病院内での存在が大きくなっていたからです。

理事長の一言で決めることはできるのですが、そうはできません。そのためだけではないでしょうが、威一郎先生が急逝肺炎を起こして亡くなられました。

副院長は病院を去られ阿明先生が理事長になりました。精神科病棟は新築され次に長期入院の慢性期病棟も改築されました。最先端の設備を目指した病院は目標を捨て、大きく方向を変えました。

それからの阿明先生のお仕事は凄まじいといしか言いようはありません。介護付老人保健施設、特別養護老人ホーム、デイケア、老人ホーム、その中間のケアハウス、いくつもの老人の施設を続けて創られました。入所希望者が多くて受け入れる施設が他になかったからです。これまでは貧しいご家庭では寝たきりの老人を介護するのに苦労ばかりでした。少しはお役に立てたはずです。この頃は介護保険制度ができてまた忙しくなりました。

古い他の病院を買収して、長期慢性期病院にして入院可能のベッドを増やしました。そうすると他の病院から長期入院の患者さんが回されてきました。長期入院の慢性期の患者さんからの収入は病院の経営には貢献が少なかったからです。

それを承知でここは受け入れました

途中で休むことはできなくなりました。収益を上げるのが目的でないことを世間は理解していたので、評判はますます上がりました。国公立を退官した先生方が集まってこられる

ようにもなりました。

立派なホスピス病棟もできました。これは新聞に取り上げられてまた評判になりました。若い真面目な先生方が入ってこられるようになりました。生まれつき不幸な幼児たちの居場所も作りました。次に子供ホスピス施設の開設の話も来ましたが、まだ実行は先になりました。

市内にも小さなクリニックを作られました。青春科外来で、これは先生の後輩から頼まれたものでした。子供たちの診察のほかに、週に一度だけ先生の診療もありました。その日を楽しみに通ってきて、話を聞いてもらう患者さんの日でした。本院を退院した元患者さんたちでした。

変わった事といえば、徘徊老人のために考えられたことがあります。近所に住む親孝行の息子さんのことです。老々介護というのでしょうか、息子さんは六十歳過ぎ、お父さんは九十歳過ぎで徘徊の癖がありました。息子さんが疲れて眠っている時お父さんは外に出られ、徘徊の末、池に落ちて亡くなりました。

阿明先生は池の周りに金網の柵を作るように市に要求されました。市の答えは来年度の予算に計上するというものでした。阿明先生は怒って、病院の費用で柵を作られました。池の周りを全部柵で囲むのは大きな作業でしたが危険な箇所だけで済みました。今までも子供が溺れたり身を投げる人もいて危険視されていました。一か所だけ開閉するところを決められ、ボートを一艘常備されました。これからも何があるか

分らないからです。

それでも先生は不満でした。先生はそんな老人を受け入れる施設を作り、病院全体の病棟を囲む大きな空間を作られました。それは相当に広いものです。敷地全体を柵で囲って、運動場でも駐車場でも道路でも、夜の何時でも誰でもこの中ならどこでも自由に徘徊できるようにしたのです。夜警の人が時間ごとまわりますから、危険は少ない。

こんな話をいくつしても終わりません。

言いたいのは、それでも先生の気持ちはよく分からないということ。人間の命の尊厳を守る、そして弱者への手助け、世の中への奉仕、という医者としての理念を先生がどんな気持ちで持つておられるのかが分からないのです。病気や弱者へのいたわりの心を、あまり表に出さないというか、それを標榜する事は敢えてなさいません。標榜は偽善だともいう風でした。

自立して自分の生を謳歌し、生の意味を見つける、それができなくなつた意識の薄い老人を、只日々ゆとりをもつて生活させてあげている、ということは、むしろ健常者の自惚れではないか。死に行くまでの短い時間だ。ただそれを知らさずに安らかに死んでいかせることが、真実なのだが、それしかない。安らかに死んでいく、その手伝いをしていただけだ。老人たちをそうやってしか見ていない、ということがいかに傲慢ではないかと思うことがあります。先生はその考えに固まっています。

虚空山の見晴らしのいい中腹に立つて、先生が眼下の病棟群を見下ろしている。そこには次々に死へ向かつて流れていく老人たちの列が見える。優しい微笑でそれを見送る阿明先生。そんな不気味な光景も浮かびます。

まるでどこかよその国の権力者が、大勢の人間を群集にして死へ導いていく、彼等は充実して生きていく行進をしているつもりでいるのに、破滅に向かつて行く、そんな映像さえ浮かびます。怖くてそれ以上考えないようにしました。

それでも私もだんだん先生の考えが理解できたような気になりました。怖いというより麻痺してしまつたようです。私の母もいずれこのどれかにお世話になるはず。長く生きて、いつまでも笑顔を見せて欲しい。けれどその道には行つたら、ただ見守るしかありません。

私の記憶違いかもしれませんが、ある時に、先生がふと、安楽死、という言葉が発されたことがあるような気がします。それは恐ろしい言葉でした。私はすぐ忘れようと思つた。しかし出来ませんでした。私の聞き間違いかもしれません。私が診て回っている患者さんたちの顔が一度に嵐のように頭の中を渦まきました。

ちよつとだけ私の個人的な話をします。

私が高校生の頃、先生はまだ中学生でしたが、将来先生と結婚するかもしれない、などと考えたこともありました。しかしその考えは、かえつてこれ以上親しくなり過ぎてはいけ

ないという、気持ちも起こさせました。先生のお宅にお嫁さんとして入ることなどは、想像できなくなりました。

看護学校に入ると、旅行に行ったりお酒を飲んだり沢山遊びました。卒業すると知らない世界を見たくてよその県に就職しました。少女時代の先生との付き合いは楽しい思い出として残っているだけでした。そしてそこで結婚しましたが、二度も失敗しました。将来への希望をあまり持てない日々を送っていました。

先生から虚空山病院へ来るように言われた時は嬉しかったです。十五年ぶりでした。先生の容貌は変わっていました。背は伸びて痩せて後姿は別人でした。髪は縮れて長くあの可愛らしかった眼は彫りの深い眼窩に沈んでいました。

それでも医者としては立派になられたはずです。診察など仕事は人一倍こなされ、お金儲けには興味はなく贅沢も嫌いでした。精神科病棟の五階に自分の空間をつくられました。他の人は滅多に院長室へも入れません。まして個室へは私だけが許されました。それも掃除と洗濯くらいで簡単でした。食事は患者さんたちと同じものを三食とられました。

しばらくすると昔の気心が知れた気持ちも蘇ってきて、ちよつとした無駄口も交わすようになりました。それでも身分の差というか立場の高さのちがいというか、昔とは違います。ある時、先生の気分がいい時でしたか、ゆつくり話が出来るような時でした。私はつい至らぬことを言ってしまった。たまには、ご自宅へでも帰られたらどうです、という一言で

す。先生は途端に顔を曇らせて下を向かれ、数秒何か考えられてから言われました。

「お前は、アフロデイトーというのを知っているか」

あとは独り言のようでした。

「それは愛と美の女神だ。母が好きだった木彫りの彫刻のついた置時計があった。その女神が抱えていた時計だ。マントルピースの上に置いてあった。それは部屋の光と温かさの中心だった。聖なる守り神だった。誰もがそれを一目見ることで、そこにいる証明を貰えた。ある時それが、何の意味もなく汚された。おれはその瞬間を消すために、わざと汚ならしくそれに墨を塗りつけた。今俺はそれを見たくない、そこには入れない」

喋ってからさらに力のない静かな表情に戻りました。それは深い喪失感の静かさでした。暗い淵に落としてしまった大切なものへの未練と、もともとそうなるのは仕方がないのだという無意識の考えが、先生の身体を引き裂くようでした。その葛藤にどう立ち向かうかが分からないまま立ち尽くす静かさでした。もはや焦燥もなく、諦めの虚無感が先生を占めていました。

しかし、またそれが汚されたと思う悲しみの瞬間、逆方向からの温かい得体のしれない風が彼の身体を包み込もうとしているのに身構えなければなりません。そのためには、その時は怒りでもって応えるしかすべはなかったのでしょうか。私も幼い頃その黒いアフロデイトーをお部屋で見た事があ

ります。私は先生から話を聞く前から、その印象はずっと持っていましたのですぐに理解することができました。

先生はそれからもう喋らず黙って出て行かれました。

先生のお仕事はだんだん忙しくなってきました。そして副院長先生との意見の相違は決着がつかないまま長引いていました。

その頃副院長先生が看護師や他の先生の前で、薄っぺらな博愛主義、などの言葉で暗に阿明先生を非難しているのを聞くことがありました。私はそれを阿明先生にお伝えしました。先生はさらに意固地になりました。

威一郎先生は心労で大分お疲れでした。そのためだけではないでしょうが、とうとう威一郎先生はお亡くなりになりました。葬儀が終わって二か月ほど経ってからでしょうか、阿明先生が私に告げられた時は驚きました。冴子さんには家を出て行ってもらおう、ということでした。誰の意見も必要としない先生でしたから誰も、といっても私しかいませんが、逆らうことはできません。先生は誰かと結婚してそこに住みたのかな、とも思いました。すこし嫉妬もありました。

冴子さんが家を出られる日、私は見送りに行きました。髪も整えられて、さっぱりした身なりで六十代とも思えないほど美しく、名残も悲しみの表情もありません。いろんな思い出が浮かんできて私の方が悲しいくらいでした。

「貴女にはお世話になったわね、ありがとう、阿明さんをよろしくね。可愛い阿明さんは大好きだった、よろしく伝えてね」

それがお別れの言葉でした。

私は先生にその通りに伝えました。その晩私は先生の部屋に呼ばれました。そして有無を言わずに、私を求められました。私はそれに応え精一杯応じました。先生は激しく、まるで心身全てに押し込められて沈殿した長い間の苦しみが情欲になって一気に迸るようでした。

私は先生が時々下町の卑猥な場所に足を踏み入れられているのを知っていました。私は先生の苦しみをすべてわが身に受けようと思っていました。冴子さんをずっと長い間求めておられたことも知っていました。

それからすぐに先生は家を取り壊されました。どうしてもわかりませんが、それでも先生の悲しみは分かるような気がしました。

時の過ぎていくのが、分からないような日々が続きました。私は日々の業務を正確にこなし、陰ながら先生のお仕事に尽くしてきました。二十年も過ぎたでしょうか。虚空山病院グループはさらに大きくなり、市内県内はもとより国内でも評価の高い医療グループの一つになりました。厚生省のお役人も地方の視察ということで度々お見えになりました。

確かに借金は増えましたが、経営は立派な事務長が經理面

では間違いなく取り仕切り、先生の生活ぶりや人柄で銀行は信頼をおいていました。

また退官された教授が副院長として来られました。先生の信頼は厚く、副院長のおかげで、大学とのつながりもますます深くなり、難しい手術や治療は大学との共同作業で成果を上げました。若い先生方の研修の場としても、研究論文のためにも、ここは重宝がられました。

それでも精神科と長期入院の慢性化病棟、老人施設はこの中心であることに変わりはありません。安心して死んで行かせる、それが大儀だと言われたような昔の言葉が私からは消えません。私はそれを信じてついていきます。しかしそのことだけで、長い年月を楽しみもなくコツコツと身を費やし、日々二十四時間の繰り返しに埋没している先生のお気持ちに分かりません。もちろん先生が、老いた人々に明るい生活を、価値ある老後を、命の輝きの日々を、と謳われたら私は否定はしないけれどそのために先生が身を粉にして働かれる姿は浮かびません。

先生は相変わらず五階の部屋に住み、食事は患者さんと同じ、糖質制限の食事、高脂質制限、癌患者さんの食事、精神科の食事、など順番に味わっておられました。ただお酒は一人でよく呑まれ、煙草が多いのが気掛かりでした。

先生のお部屋に呼ばれるのは嬉しい事でした。私は精一杯尽しました。私はもう六十歳を過ぎていました。ここで老いていく事に悔いはありません。

一つだけ大きな出来事がありました。でも知らない人には少しも大きくはありません。

ある時、かなりお歳の女性が他施設から転院されてきました。二十年ほど前に乳癌の手術をされて最近になって転移が見つかったけれどそれが肺と脳に飛び余命は長くない患者さんでした。希望されてここへ来られたとのことです。先生の指示でホスピスの特別室に入られました。衰弱されたお婆さんという感じでした。お歳は八十八歳、私は名前を見た時、声をあげそうになりました。久能冴子と書いてありました。昔の面影はまったくありません。痩せて小さくなっておられました。意識は朦朧として、喋ることもままならないようでした。それでも先生の顔を見ると、かすかに微笑まれました。私は先生の顔を見ることができませんでした。先生の心の荒れた気持ちを感じたくありませんでした。昔の恋しさと後悔と、それ故に拒否しようとした悲しみ苦しみ、人を容赦なく迷わせる荒れ野の吹雪が先生の胸を吹きすさんでいたはずです。

私は若い看護師を呼び、冴子さんの担当にして、一緒に先生の指示を受けました。鎮痛剤投与が主な仕事でした。私は知らぬ顔をしていました。私がいつもそばについていることはできませんでした。先生と冴子さんがどんな話をされたか想像したくありませんでした。胸が張り裂けそうではできませんでした。

冴子さんはそれからしばらくしてお亡くなりになりました。

私は一人になって声をあげて泣きました。母は調理場の隅にしゃがんで泣いていたそうです。葬儀は先生が一人でなさいました。

私は先生が私を部屋に呼ばれるのが分かっていました。冴子さんの事は一言も口になさいませんでした。私は今までになく激しく抱かれました。しかし肉体の激しさと反対に、溢れてくるものは悲しい静かな奔流でした。

冴子さんは他に身寄りがなくお骨は長い間先生のお部屋に置いてありました。私は何もお尋ねしませんでした。お墓の中で、お父様とお母さまのアデレさんとの間にお骨を置くことを躊躇われたのだらうと思ました。かといってほかの考えがあつたとも思われません。

貴方が来られる前、三、四か月前だったでしょうか、先生は体調を急に壊されました。ずっと前から悪かつたのを黙って我慢されていたようです。病気だということは分かつておられたはずです。お仕事が忙しいのは分かるのですが、仕事のためというよりは、病気を忘れるために仕事に夢中になるといふうでした。

私は先生に大学へ行って精密検査と治療をするように勧めました。最後は泣いて頼みました。でも先生はそれをわざとのように、軽く受け流し相手にしてくれませんでした。わかっている、が口癖でした。先生は病気とその進行具合は分かっておられたのです。

その頃はもう病院経営は、副院長と事務長にほとんど任ざられていました。先生は診察だけ、それも患者さんと話をするだけが仕事でした。話を聞いておられるだけでした。医者としての大義や誇りには程遠いものでした。淡々と仕事をこなして、日々を義務で送る、いや義務というより、例えば呼吸する事といえるほどの自然の日々でした。生きているのを嫌い、死をも厭わない厭世感に捉われておられるとも違います。

何か心に決するものがあつたのでしょうか。哲学的な深い考えが先生をそうやって生きさせる源になつていたのでしょうか。私にはわかりませんでした。

咳がひどかつたです。胸から噴き出すような咳でした。それでもピースをちよつと吸つたり匂いを嗅いだりされていました。だんだん体調も悪くなつていくようでした。

ある日、節子さんを診察された時、私は傍にいました。それは最後の診察のつもりだったのでしょう。節子さんはもう六十五歳になつていました。身体が随分小さくなられて、白髪がとても綺麗でした。節子さんと先生が言葉をかけると、小さな顔からいつもの微笑でした。節子さんは、風邪一つ引くことなくほとんど病気もありませんでした。ただ先生のこととは多分これからは何も覚えていないでしょう。

先生は亡くなられる一か月ほど前から五階の部屋にこもりつきりになられました。決して誰とも、副院長とも事務長とも、会われません。仕事の事はすべて打合せ済だったので。

この状況は固く口留めされました。私だけが出入りしました。一日中音楽を聴いておられました。

先生は死を覚悟されていたのだと思います。私はただその時まで、できる限り尽そうと思っていました。先生の言われることをすべて叶えること、それ以外に私にできることはありません。

お部屋の整理を急がれました。私は指示通りに従いました。ほとんど捨てる物ばかりでした。

ある時ふと見ると、冴子さんの骨壺が見当たりません。私は気が付かないふりをしていました。けれども私の頭の中には一つの映像が浮かんでいました。真夜中、先生がこっそり骨壺をもって池の真ん中にボートを漕いでいかれる姿です。骨壺は音もたてずに静かに真つ黒な水に沈んでいきます。自分もいずれそこに沈んでいくという安心感のためか、お顔は安らかです。私にはとても怖い、そして美しい映像です。

身体は急速に衰弱していかれました。それに伴ってお顔がだんだん優しくなっていきました。私が食事は運び、身の回りもすべてしました。夜は一人でぐっすり眠られたようです。私は沈痛剤とモルヒネも使い大量に用意しておりました。意識はいつもはつきりされたままでした。ある夜、私の携帯電話に明日早く来てくれ、と連絡がありました。いつもよりしつかりした声でした。翌朝行くと、ベッドで冷たくなっておられました。

これで私の話は終わりです。

病院は副院長が新しい理事長になられ、ますます発展していくでしょう。私も結構な歳になりましたので、新しい院長から言われれば、引退も近いでしょう。母はまだ営繕部の雑用のお手伝いをさせてもらっています。二人とも虚空山病院にはお世話になりました。よく言われるように、長いようで短い日々でしたが、思い出してみると沢山の事がありました。それはそれも過去の事で、だれも知らなくなっていくでしょう。これは言いたくなかったのですが、ここまで来たのでお話しします。貴方にお会いすることはもうないでしょうから。

あれは冴子さんが亡くなられる二日ほど前の事です。私が身の周りのお世話をしていました。冴子さんのお部屋は特別室でしたから、浴室もついていました。冴子さんはもう意識がほとんどなく静かに眠っておられるようです。浴室のタオルを片付けていたら、誰かが部屋に入ってきました。阿明先生でした。何故か私はカーテンの陰に隠れました。

阿明先生は五分ほどジッと冴子さんの寝顔を見つめておられました。そしてしゃがんで両手でその顔を挟み、長い間接吻をされていました。私には先生の表情は見えませんでした。出て行かれる後姿を少ししか見ることができませんでした。あんな悲しそうな人間の後姿は見た事はありません。これからもないでしょう。